

ひきこもりの子どもをもつ母親の「親の会」での体験 ～価値観の転換の必要性を認識するまでのプロセス～

キーワード：ひきこもり、母親、親の会、価値観の転換

○齋藤まさ子¹⁾、本間恵美子²⁾、真壁あさみ¹⁾、内藤守¹⁾
新潟青陵大学¹⁾ 新潟青陵大学大学院²⁾

I 目的

ひきこもる子どもの家族が、内在化された社会一般の価値観を転換していく過程について浅田¹⁾が論じている。小野²⁾は、不登校児の親の変化過程で価値観の放棄や脱皮の段階について述べ、そこに至るよう立ち向かうためには強い心理的支持が必要であると述べている。自助グループひきこもり「親の会」(以下、会)は、母親の前述の段階に至るプロセスにおいて、どのような心理的支援を行っているのだろうか。本研究では、母親が会に参加し、子どもとの関わりにおいて価値観の転換の必要性を認識していくまでの内的変容プロセスを明らかにすることを目的とした。

II 方法

1. 対象者：北陸、東海、九州の各地区に活動する会に継続参加する23名の母親で、会参加年数は5年未満2名、5-10年21名であった。ひきこもり青年は、男性18名(78.3%)、女性5名(21.7%)であり、ひきこもり平均年数は14.6年で9-22年と開きがあった。
2. データ収集：2011年10月～2012年3月の期間に行い、面接時間は1～2時間で半構造化面接であった。
3. 倫理的配慮：①研究の趣旨、②任意性、③結果の利用、④プライバシー保護、⑤テープの使用許可について説明し同意書を取り交わした。
4. 分析方法：木下による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを採用した。

III 結果と考察

次のようなストーリーラインが考えられた。(〈〉はカテゴリー、[]は概念を示す)。

ひきこもりの子どもをもつ母親は〈入会までの背景〉で[手の打ちようがない]状況のなか[相談しても空回り]を繰り返し、子どもがひきこもった[原因は自分の不適切な関わり]だと苦悩する。会に参加した母親は〈孤独感からの解放〉感を味わい、苦しみを分かち合える人たちと出会え[無条件の安堵]をする。また、他メンバーの表情や語りを聴き[変化への希望]を抱くとともに[気持ちの立て直し]ができるようになる。気持ちの安定とともに、徐々に〈子どもの姿への直面化〉に向かい[語り合いで気づきの深化]や[講演会で学習の深化]によりそれが促進される。こうして〈混乱状態からの脱出〉が可能となり[叱咤激励は自己の抗不安薬]であったことに気づく。これらの体験は〈価値観の転換〉の必要性の認識へとつながる。

次にカテゴリーごとに概念間の関係を述べていく。

1. 価値観の転換を支える心の安定

[相談しても空回り]の体験をした。これは「どこに行ってもわかってもらえない」という強い孤独感を抱き自尊心を傷つけられる体験であった。また、ひきこもった[原因は自己の不適切な対応]という思いは「自分が情けない、私の責任」と自己を責め、自信喪失の状態であった。この状況のなか同じ思いを持つメンバーと出会うことはまさに〈孤独感からの解放〉であった。「自分1人じゃない。安心した」と口々に語った。また、会で自分自身を受け入れてもらえ「大丈夫、先に進める」「世間話するだけでも気持ちが戻れる」など[気持ちの立て直し]が図られた。これらの心理的安定により〈混乱状態からの脱出〉ができ、子どもの実像の客観視が可能となった。子どもにとって親は最も身近な支援者であり、母親の心理的安定は必須条件である。会のメンバーと出会い、孤独感から解放されることが大きな転機となっていた。

2. 子どもの心への直面による認識の変化

母親は〈孤独感からの解放〉により徐々に〈子どもの姿への直面化〉が可能となった。他メンバーの語りを傾聴し自らも語ることで[語り合いで気づきの深化]が図られた。これは[混乱状態からの脱出]や「家で子どもとの関わりで気づかされる」「対処の仕方がわかる」などにつながった。[講演会で学習の深化]は「あの子のこと何もわかっていなかった」「受け入れることが第一」など、子どもへの批判的な見方から理解の視点へと変化した。それまでの対応が[叱咤激励は自己の抗不安薬]であったことに気づき、自己の〈価値観の転換〉の必要性を認識していた。会は自己を受容してもらえらる場だからこそ、仲間のアドバイスや講演会での学習内容を受容でき、価値観の転換に結びついたものと考えられた。

IV 結論

会で苦しみを分かち合い支えあうことで子どもに直面でき、認識が変化していくという価値観の転換へのプロセスが明らかとなった。

本研究は平成23年度～25年度科学研究費補助金基盤研究(C)(No.23593475)の助成を受けて行った。

参考文献

- 1) 浅田(梶原) 彩子. ひきこもり家族会と家族の認知変容. 奈良女子大学社会学論集. 2010;17:189-207.
- 2) 小野修. 不登校児の親の変化過程仮説 パーソンセンタード・アプローチ. 心理臨床学研究. 1993;10(3);17-27.